

# 大條家ゆかいの茶室 思い出アルバム

2017年7月16日(日)に、大條家菩提寺「徳本寺」で開催の  
『とことん味わう江戸時代の 大條家ゆかいの茶室』勉強会  
において、皆様からご提供頂いてパネル掲示した  
思い出資料と配布資料の一部を、  
思い出アルバムとして冊子化いたしました。

当日は、  
パネル掲示をゆっくり見て頂く時間がなかったかと思います。  
この冊子で補足させて下さい。

2017年8月吉日  
ゆかいの茶室にひかりをあてるっちゃGO  
山元いっ茶組

- ・印刷、冊子化、郵送の諸費用は、勉強会にご参加の皆様からの活動費へのカンパを使わせて頂きました。
- ・冊子化作業は、勉強会主催ポラリスのメンバーにお手伝い頂きました。

～障害者をつくる「山元の魅力」を発信するプロジェクト～

ポラリスの勉強会

## 学ぼう。山元のすごい歴史

山元の歴史・民俗・文化・自然にふれる  
ポラリスの「対話と学びの場」のご案内

3回にわたり開催★

- 第1回 「絶対強面」が山元に帰ってくる！  
5月21日(日)
- 第2回 八雲坂神社が6年ぶりによみがえる  
6月18日(日)
- 第3回 とことん味わう江戸時代の  
大條家ゆかいの茶室  
7月16日(日)

ポラリスの勉強会

2017年は、3回にわたって勉強会を開催します。地域の方々が楽しく気軽に山元町の魅力にふれる「対話と学びの場」を開催し、学ぶ楽しさと新たな人とのつながりを作りながら、その学びの成果として山元の魅力(歴史・民俗・文化・自然)を紹介する「山元ストーリーブック(仮称)」を制作します。

第1回 5月21日(日) 第2回 6月18日(日) 第3回 7月16日(日)

10月 山元ストーリーブック(仮称)完成

第3回 とことん味わう  
江戸時代の  
大條家ゆかいの茶室

日時：7月16日(日) 13:30 - 15:30  
会場：徳本寺 菩提寺(徳本寺)〒260-0202  
料：1,000円

お申し込みは、ポラリス事務局まで  
電話：0266-22-1111 FAX：0266-22-1112  
Eメール：polaris@polaris.or.jp

お申し込みの締切は、7月10日(金)です。

お申し込みの際は、お名前、住所、電話番号、メールアドレス、お申し込みの人数をお知らせください。

お申し込みの締め切りは、7月10日(金)です。

お申し込みの締め切りは、7月10日(金)です。



本「思い出アルバム」は、12月完成予定『山元ストーリーブック(仮称)』(お一人につき1冊送付)とは、別のものです。  
第3回目勉強会『とことん味わう江戸時代の 大條家ゆかいの茶室』の参加者にのみ、補足としてお送りするものです。

# 茶室の今昔

2016年 夏



昭和末期頃か？



# メッセージ

## 山元町のゆかりある茶室を 修復・保存して、ステキに活用しよう！

町指定文化財の「茶室」(山元町坂元字館下119-2・昭和7年移築)は、老朽化に加え東日本大震災により著しく損傷しています。

本茶室は、藩政時代に当町域を治めた大條家にゆかりのあるもので仙台藩の茶の湯文化を伝える希少な遺構であり、東日本大震災によって町内の歴史的建造物が数多く失われた中で震災を乗り越えて郷土の歴史を伝える貴重な建物でもあります。

### ゆかりの茶室にひかりを当てるっちゃGO 山元「いっ茶」組

茶室が元の姿に戻ったら、私達も町も、もっと元気になれる。  
茶室の修復と保存の実現に向けて活動する  
山元町民の会。ステキな活用を夢見、考える会。

#### 【発起人】 \* 五十音順

岩佐大輝(農業法人(株)GRA 代表)

庄司アイ(やまもと民話の会)

早坂文明(曹洞宗 光明山 徳本寺 住職)

三浦寛也(コロンビア大学日本文化イニシアチブ芸術監督・ベイツ大学准教授作曲家)

連絡先:代表 清水ますみ

〒989-2202 宮城県亘理郡山元町高瀬字合戦原30-2 ポラリス「こう・ふくアトリエ」内

電話:090-2528-6107 Email:yamamoto.iicchagumi@gmail.com

茶室の写真や、思い出話を  
ととしお寄せください！

ボランティアでお手伝い  
して下さる方、  
募集中！

#### 大條家ゆかりの茶室の保存と活用を願う会

茶室の早急な修復、保存、活用の実現の為に、  
技術面、資金面、活用面など様々な角度から、  
山元「いっ茶」組と連携して山元町をサポート・応援する会

発起人:32名(建築専門家、有識者中心)

代表 永井康雄 山形大学教授・建築史家



山元の地に、大條家に大切に守られたからこそ  
残ったこの茶室は、仙台藩の歴史にとっても重要、貴重な財産で  
あり、未来に残すべき歴史的建造物です。山元町の皆さまの今ま  
でのご努力にエールを送り、心より応援させていただきます。

ゆかりの茶室にひかりを当てるっちゃGO  
山元「いっ茶」組

地元で頑張る皆さんを応援します！

「大條家ゆかりの茶室の保存と活用を願う会」

# 役場に提出した要望書

2016年10月吉日

山元町町長 齋藤 俊夫 様

山元町指定文化財「豊臣秀吉ゆかり茶室(通称)」の修復と保存を求める要望書  
及び 山元「いいっ茶」組設立・活動要旨表明書

ゆかりの茶室にひかりを当てるっちゃGO  
山元「いいっ茶」組  
代表 清水ますみ

私達山元町民は、山元町坂元字館下119-2にある、町指定文化財の「茶室」(通称「豊臣秀吉ゆかり茶室」)を目にする時、老朽化と損傷で荒廃が加速するその姿に、深い心の痛みを感じざるを得ません。

町民には長年の愛着ある茶室であります。さらに、東日本大震災により多くの歴史的建造物が失われた中、震災をのり超えて残された、町の歴史を伝える貴重な文化財と認識しております。町復興の兆しも見えてきたからでしょうか、茶室が元の姿に戻ったら私達も町も、もっと元気になれるという思いも湧いて参ります。

そこで私達は、茶室の修復と保存の実現に向けて活動する会として、

ゆかりの茶室にひかりを当てるっちゃGO 山元「いいっ茶」組  
を設立いたしました。町内から聞こえてくる茶室への思いや、保存を願う声、修復や活用についての意見やアイデアを結集し、役場の皆さまとご一緒に、実現に向けて活動を始めたいと思います。

つきましては、山元「いいっ茶」組は、以下を要望し、活動の要旨を表明いたします。

## 【要 望】

町指定文化財の「茶室」の修復と保存を要望いたします。

特に、早急の要望として、

- ・茶室損傷を防ぐための防護策(カバーシートなど)を早急にこうじること
- ・防護していることを説明するボード(立て看板)を、茶室前に設置すること
- ・専門家による茶室来歴や建築物としての検証・調査を、即、開始すること

## 【活動要旨】

おりしも、震災後の文化庁の「東日本大震災被災文化財建造物復旧支援事業(文化財ドクター派遣事業)」による調査で茶室修復の助言がなされ、調査された専門家の方々を中心に、早急な修復、保存、活用、実現の為に、技術面、資金面、活用面など様々な角度から山元町をサポート・応援する「大條家ゆかりの茶室の保存と活用を願う会」が設立されるとお聞きしました。ここには、専門的で広い視点での「茶室」の歴史的意義についての示唆もあり、山元町民として改めて、茶室の修復と保存に向けた活動が、責任の重いものであることを痛感した次第です。

山元「いいっ茶」組は、「大條家ゆかりの茶室の保存と活用を願う会」の山元町発起人としても登録し、アドバイスも頂き、連携しながら活動させて頂く所存です。

今後以下の活動を行い、町役場に協力させて頂きます。

- ・修復・保存を求める声を、町内外から広く集めて、町役場に随時お届けします
- ・資金調達においては、募金、助成金、寄付、ファンドなどを多角的に検討して、協力いたします
- ・町民への茶室に関する情報の発信(勉強会、講演会、チラシなど)を積極的におこないます
- ・町役場と情報交換、話し合いの機会をつくり、着実な進捗に協力します
- ・保存後の活用・維持について、意見やアイデアを集め、実現可能な具体的活用策を提案し、町の活性化に寄与いたします

以 上

# 茶室に関する山元町役場との経緯

■: 山元町役場関連

2016年夏

- ・文化財ドクター(\*)による茶室の再点検と生涯学習課と面会
- ・「大條家ゆかりの茶室の保存と活用を願う会」発足  
\*建築等の専門家・有識者の会  
代表 永井康雄(山形大学) 発起人 26名

(\*)文化財ドクター  
2012年度文化庁の東日本大震災文化財建造物復旧支援事業による調査

2016年初秋

- ・ゆかりの茶室にひかりをあてるっちゃGO「山元いっつ茶組」発足 \*山元町地元の会  
代表 清水ますみ(ポラリス こう・ふくアトリエ) 発起人 4名

2016年11月 第1回目 茶室勉強会(於 合戦原学堂)

学ぼう。山元町のすごい歴史

～古代の線刻壁画と江戸の大條家ゆかりの茶室～

講師 永井康雄((山形大学) 参加者:約90名

2016年冬 署名と寄付 集め \*別添1

2017年1月31日

山元町長に面会

- ・養生カバーの即設置と、修復・保存の要請
- ・著名、寄付金を手渡す
- ・協力の表明

2017年1月

「山元町茶室仮養生工事概算見積書」の提出

2017年2月

「山元町茶室調査報告書作成について」の提出

2017年2月7日 河北新報  
「仙台藩家臣・大條家ゆかりの茶室  
／大震災で被害修復手付かず」

2017年4月

役場から、寄付金の領収書と寄付採納受託 の受領 \*別添2(省略)

2017年6月19日

文化財保護委員会の「茶室等の保存活用の再検討」 満場一致で採択

2017年7月

茶室養生カバーの発注

2017年5月10日 河北新報  
「談 物理学者 伊達宗行さん」  
茶室は江戸時代、藩主の後継者問題で功績を挙げた先祖が、殿様から賜ったものです。

2017年7月 第2回目 勉強会(於 徳本寺)

学ぼう。山元町のすごい歴史

～とことん味わう 江戸の大條家ゆかりの茶室～

2017年8月7日 河北新報  
「被災の山元町文化財「大條家  
ゆかりの茶室」  
修復・活用へ町民ら奮闘

2017年8月 山元「いっつ茶」組

# 別添1

## 町長に手渡した ・寄付集計と内訳 ・署名のまとめ

山元町町長 齋藤 俊夫 様

2017年1月31日  
ゆかりの茶室にひかりをあてるっちゃGO  
山元いっ茶組

下記の使用目的に使って頂きたく、寄付申し上げます。

金 292,383 円

### 使用目的:

山元町指定文化財である茶室(山元町坂元字館下119-2)の現状以上の破損を防ぎ、学術的調査と、修復・保存方法の策定、その予算獲得の検討作業に入るための、早急な仮保護養生工事(カバー等)の費用及び、上記を町民に説明する掲示板設置の費用

### 寄付明細:

- ・山元町 & 「歴史勉強会」募金箱 86,901円  
(匿名複数名) (2016.11.19於合戦原学堂 NPOボラリス主催)
- ・近隣町(亘理町など) & 「亘理の歴史をひもとくおはなし会」 17,000円  
(匿名複数名) (2017.1.28於「見晴」)
- ・その他(東京都など) 55,000円  
(匿名複数名)
- ・NPO法人日本古民家保存協会 133,482円  
(神奈川県鎌倉市)

### NPO日本古民家保存協会の「秀吉ゆかりの茶室保全」募金コンサート風景

2016年12月  
(於 鎌倉市)

茶室惨状の  
写真  
募金箱



## 署名(NO.1)のまとめ

2017年1月31日 山元「いっ茶組」

### 期間

2016年11月19日～2017年1月30日 約1.5ヶ月

### 集計

総計 378名

- ・山元町 214名
- ・山元町近隣(宮城県内) 一亘理、丸森、名取、岩沼、仙台など 91名
- ・宮城県外 一東京、神奈川、京都、大阪、奈良、青森、沖縄など 73名

\*会と組の発起人、及び2016年11月19日開催の勉強会「学ぼう。山元のすごい歴史」参加者(87名)を核とした収集

### 分析

- ・つばめの社、坂元町、高瀬、浅生原、山寺・・・数が多い。
- ・元山元町民に限らず、近隣町からの数に、関心の高さがうかがえる。
- ・県外の、有識者達の数が多い。Ex.日本イコモス国内委員会監事、書家、作家、学者、建築士、内閣府

### 所感

想像以上の、山元町民の茶室への愛着の思いと保存を望む気持ちを実感  
全国レベルでの関心の高さと応援の声に、責任を感じる

- ・署名に消極的、拒否は全くなかった。
- ・山元町内では、以下の言葉を多くいただき、うれしい思いだった。  
「山元町民がやるべきところを、有難い、ありがとう」今まで、どうしたものか悩んでいた、やっと初めてもらった。感謝  
「町民ですから、署名するのは当たり前です」
- ・県外(関東、関西)の、有識者中心に、茶室への関心の高さと、保存への応援に、大きな手応えと責任を感じる。
- ・関連して、山元町に限らず、京都の茶道関係者やお茶販売関係者からの署名希望も届いている。次回の署名対象にしたい。
- ・アメリカからの署名希望もあり次回にまとめられると思う。日本、茶の湯への関心はグローバルに強いものがあると感じる。

2017年7月16日 山元「いっ茶組」

# 大條家の家紋

## 沢瀉 (おもだか)

主な使用家：毛利、木下、土井、水野、浅野



オモダカは池や沢、田に自生するクワイに似た水草で、可憐な花を咲かせます。葉脈が高く面高な顔に似ていることから「面目が立つ」に通じ、葉が矢じりに似ていて別名「勝ち草」と呼ばれます。武士の間で縁起紋として普及しました。



家紋  
大條家家紋  
抱き沢瀉(おもだか)



オモダカ  
矢やじりの形に似た葉の先が、人の顔にも見えるのでこの名がある。温った所を好み夏には花茎を出し、白色三弁の花を十数個つける。秋は、地下茎の先に小さい球茎ができ食用のクワイもこの仲間だ。  
以前は、婚礼などの慶事の時に、めでたい花として床の間に飾られた。また、家紋などの紋所として図案化されている。立沢瀉・抱沢瀉などがそれで、いずれも葉や花が組みあわされた紋様。



# 語り継がれる美男の殿様 —ご帰館時の行列—

昭和47年(1972年) 丸山大蔵

## 美男の殿様

丸山大蔵

むかしむかし、坂元に立派な若い殿様がおり

馬術、剣術、水泳、書画など学問武芸一切に通じていました。

家中の武士「此のあいだ広瀬川の水遊びの時殿様は屋形様のご前で立泳ぎを御覧に入れ大そうおほめにあづかったので家来の私共までうれしかったぞ」

武士の妻「ほんとに殿様はなんでもお出来になり、評判の良いお方ですね、坂元にはいつお出でになるのでしょうか。殿様になられてからまだ一度もお出でにならないのでおがみ申したことはありません」



武士「あそうか、今度屋形様の使者として、山形の方に行く前に坂元に御帰館になるからおがまれるよ」

其の日が来ました。殿様の行列は大手先まで来たとのことです。

騎馬武者が一騎来ました。続いて槍持、鉄箱鉄砲隊ときました。

大ぜいの騎馬武者と共に一段と良い馬に乗って殿様がきました。

大ぜいの騎馬武者と共に一段と良い馬に乗って殿様がきました。

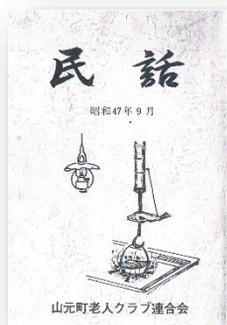
武士の妻は子供だけを家の前の道路にすわらせて、自分は垣根の内にと身をもひそめて、おがむことにしました。

初めておがむ殿様のためか胸の鼓動は高鳴っていました。表は黒裏は赤の大形の陣笠を白い太ひもであごに結んだ、その顔は色白のおはだに陣笠の赤色がうつつたのか、ほうっとさす赤味はさえざえと輝き何ともいえないお顔であったそうです。

赤地の陣羽織の背中には緑の鮮やかな、おもだかの大紋を浮かし大きな房のりぼんを配したその勇姿は目に焼付く程麗しい光景であったそうです。

武士の妻は自分の夫が、かくも立派で評判の良い殿様に御勤めしているということが、如何にもうれしく名誉であると心から感じたということでありました。

-51-



文化を拓く人々

伊達篤一郎

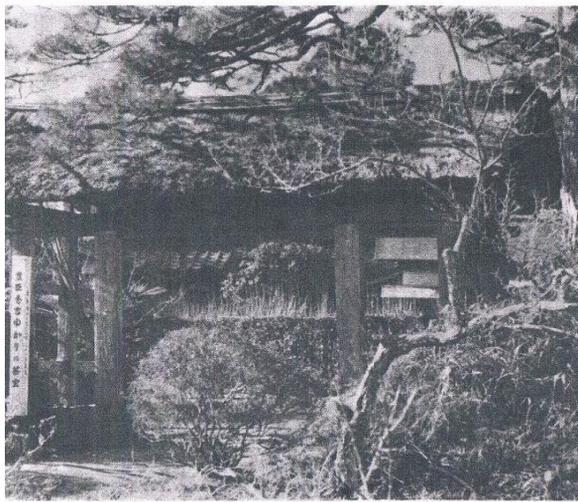
このたび山元町の坂元の方々を中心と成られて「郷土の文化を拓く会」を發足された由、誠におめでたい限りであります。会の名称をきめるに当たつても文化を守る、創る、育てるなどいろいろ論議の末に「拓く会」に決定されるなど、関係の皆さんが冒頭からこの事業に熱心に取り組んでおられる様子が推察され、これなら立派に育つてゆくことは間違いないものと確信をした次第であります。

もともと、地方での文化活動はいうに易く、行なうに難いことは周知の事実であります。それがこの「郷土文化」といふ特異な生活環境からくる無関心が災いして、容易に拓き育てるエンジンが始動しないまま、才月が流れ去つてしまふのが現状で、決して素材が無い、少ないとは言ひ得ないと思つております。つまりはエンジンは点火しなければ始動しないのは当然であつて、その電源の役割りを負うのが「人」であります。

今回その電源として志賀さんや皆川さんなど同人の方々が文化の灯に点火されたことは地元の文化を「育て創る」大きい源動力になったことであります。御地は藩政時代から「伊達と相馬」の関連で深い歴史に綴られております。数多い遺跡がそれを物語つてゐるといへましよう。そのためには部境境いは勿論のこと町境や県境を意識せずに拓域的な目標のもとに「拓き育て、ゆく」ことが肝要なこと、思ふのです。

私達の仙台市博物館も昨年十月で十周年をむかへました。戦後伊達家より寄贈された一万点余りの仙台藩の資料に加え、昨年は三太郎日記などで知られてゐる故阿部次郎先生(仙台市名誉市民)のコレクション、軸物、浮世絵、和本など三四〇〇点余りを御遺族から寄贈され、其の他の寄託資料、寄贈資料を併せて二万点に近い収蔵品で運営されております。それ等の一点一点には古い歴史が刻まれているものばかりです。私達はその品々に歴史の重みを感じ、今日まで無事に伝え引継いできた幾代もの過去の人々の面影がしのばれるのであります。歴史は人によつて綴られますが、人はやがて消え去つて歴史を残します。資料は人が消え去つても次の世代に引継がれてゆきます。それが繰返されて次第に重さが増されていきます。私達は歴史を大事にしながら後世のために受継いでゆく責務をしみじみと感じます。

「郷土の文化を拓く会」の方々も歴史の重みを大事に支えながら埋れた郷土文化の発掘と育成に皆さんと手をつないで楽しくやつていこうではありませんか。今回早くも会報を發行されて意欲的な活動をはじめられました。この活動が竜頭蛇尾に終ることなく、細くとも長く長く根氣よく続いてこそ意義があり成果も期待できるものと思つております。私達の館でも必要があれば可能を限りお手伝いをさせて頂きたいと考えています。最後に会員皆さんのご精進を祈つてお祝ひの言葉と致します。(仙台市博物館長)

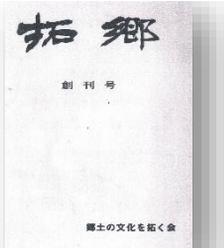


カメラ 齊藤二郎

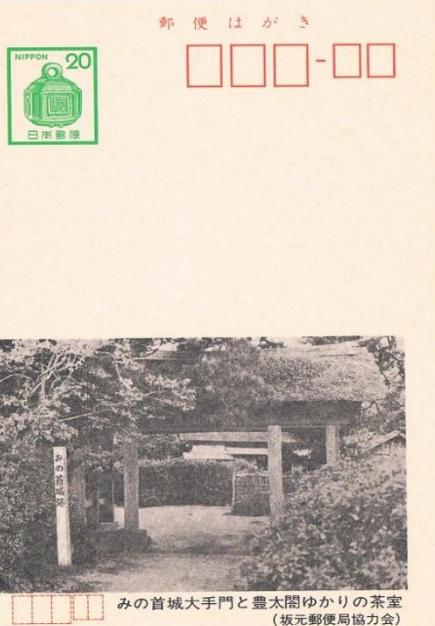
### 箕首城大手門

箕首(みの)首城は坂元館の通称である。大手門は十七世紀の始め築城当初の建設と推定される。切妻造りかやぶきの四脚門、脚も柱も榎も四百年の風雪に推えて木目もあらわに、簡素ではあるが美しい構成を見せている。曾ては中央の戸口に開きの扉、左右の柱間に板羽目に小窓、門の左右には両輪があつたと思われ。

復元して昔の姿を想像するのも楽しいが、現在の遺構のままでも路地の両側の植えこみと相対して藩政時代のふんい気を感じさせ、周辺に寂かな落つた環境を形作つてゐる。今は伊達家十八代宗康の息子で内山家につがれた方の所に属する。(S)



# 坂元郵便局開局100年記念はがき 昭和55年(1980年)



みの首城大手門と豊大閣ゆかりの茶室 (坂元郵便局協力会)

### ごあいさつ

当坂元郵便局は明治13年(1880年)12月1日坂元地区中央、当時大手先といったところに創設され、はじめは、通常郵便物のみを取扱う四等郵便局で、初代郵便局長青田彦吉、2代大石甚三郎、3代福士直孝、4代福士直温、5代阿部一男と世の推移にともない幾多の変遷を経て地域の皆様に愛され、親しまれて以来今年でちょうど100年目になりました。

山元町の著しい発展に伴い取扱事務量も増大し施設の整備拡充等のため、このたび地元皆さまの絶大なるお力添えにより立派な新局舎の完成をみる事ができました。

当局では新局舎落成ならびに開局100年を記念して、坂元郵便局協会の多大なる協賛をいただき、山元町坂元地区内の史跡を絵入りはがき2種発行し、ご希望の皆様にお分けすることになりました。

私ども職員一同は新局舎移転を機会に心を新たに、社会経済福祉の向上発展に努め地域皆様のご期待に応えたいと考えておりますので、今後とも一層のご利用とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

昭和55年(1980年)10月13日

宮城県 坂元郵便局長 後藤 繁三

# 旧坂元館三の丸のお宅に

## 内山照子さんをお訪ねして

内山照子さんは内山文雄氏（大傑家……維新後伊達と改姓……十八世宗康氏の次男で母方の姓をつがれた、故人）の夫人で、伊達家の旧宅に住まわれ、家事のかたわら茶道の師匠をしてられる。先代からの伝え聞きや、お茶の話など伺えたらと夫人をお訪ねした。



お茶室に端居の内山さん カメラ 佐藤義郎

——父（宗康氏）とは五六年ここで一緒に暮しました。私にはやさしいおしゅうとで食後のひつ時など、よく昔話をして下さい。記憶に残っているのは断片的な事ですが——

# 茶室を愛し、 茶道を教えた 内山照子先生

それを紹介する前に、史実をまとめておく方が読者の便宜であろう。

大傑家の始祖は南北朝の頃にさかのぼる、伊達一家にたつらなり禄高のわりに格式は高くいわゆる宿老の家柄。内山さんの義祖父にあたるのが、

十七世宗亮氏 天保九年一八三八—大正十三年一九二四。壮年時代に幕末維新の期を迎え藩の要職にあつて、しばしば江戸・京都に使用した。特に戊辰の年には建白書携えて海路京洛に上り、維新の志士らとも交友し百刃の下をくぐり活躍した。藩論が突つて一時らつ居したが、反正掃額に当り再び召し出されて終戦所理に大きな功績があつた。……

その後ハ職ヲ辞シテ郷國に帰リコレヨリ優遊自適風月ヲ友トシ詩ヲ賦シ圖ヲ弄シマタ世事ヲ間ハズ（墓碑銘より）……八十六才の長寿を全うした。

十八世宗康氏 明治三年一八七〇—昭和二十七年一九五二。宮城中学、現仙台一高）東京高等商業（現 橋大学）に学び、日本鉄道会社、日本鉄道院を経て東京ガス会社の要職を定年まで勤む。退職後千葉県市川に居を構えて悠々自適。……戦禍を抜けて坂元に疎開。八十二才でこの地に逝く。昭和十二年より五年間、坂本全村の要望に応えて村長を勤む。在職中広大な村有林を確保し、その後の地区財政特に文化教育公共施設の面で大きな貢献をした。なお十九世宗亮氏は教育界の長老、アララギ派の歌人としても著名。氏の長男宗行氏は大阪大学教授（量子物理学）。

……祖父は美男の偉丈夫で、若い頃江戸動めになると奥女中方がさわさわしたそで……奥様もおきれいな方で歌舞伎の梅八小紫の様に噂されたとか……十何人の子宝に恵れたが、昔は殿様はのんきなもので皆側近の家臣の里子にだした様だと父も笑つてました……維新前後はたいへん御苦勞されたが、その後は風流三昧の日々、書画に親しまれたが鑑定でも玄人はだしたとか……金婚式を迎えるまでの御長命で、生涯を殿様の御隠居らしく振舞われた様で、面白い挿話がいろいろ伝つて居るようすです。……

併し家計の方の内実はなかなか苦しく……何しろ四千石が御一新で五十五俵になったそ……家族は多いし祖母はずいぶん苦勞した様で……父が十二の時月給一円で郡役所の授業雇となつたが、この一円が一家の生計になかなか役立ったとか……祖父が先きにお話した風でしたから父は若い頃から責任が重かつたようす……退職金で市川と仙台に家をたてましたが、ゆつくり金遣を遣し「間もな戦争になり家族の不幸も重つて晩年は物心ともに不如意で……もう少し世の中がおちつくまで長生きして下さいたらと心残りでありませぬ。

茶道について何かの事ですが、私など特にお話する程の事はございません……縁あつて伊達の一家に嫁いできて由緒あるお茶室をお守りしてゆくめぐり合せになりましたので、少しはお茶の事も知っておかねばと思ひ、裏千家の小山宗静先生に主人の存命中一緒に習いにまいりました。……そのうち二・三の方からは是非教えてほしいと頼まれて……今では週二回おけいこ日にしています。人に教える事は自分の勉強でもあり、今まで気のつかなかつた事も判つてきて、自分ももっと修業を積まねばという気持ちになります。週に一回は仙台の先生のお宅で同門の方々と一緒に勉強して居ります。

何事もそうでしょうが修業は一生の勉強で、特にお茶はお花、お香、書画などにも関係が深く、また主人と客との心のふれ合いが大切ですので、巾も広く奥も深く、勉強には限りなく私などどこまでゆけます事か……坂元は昔の城下町であり、このお茶室もあることですから、一人でも多くの方に茶道の事を知って頂くのは私のつとめの様に思ひます。お茶の道は限りないのですが、年でも二年でも勉強すれば何か自分の身につくでしょう。お点前だけでなく、もの考え方や日常の行動も変わってくるはずで、

……お茶室は昭和の初め仙台から移したので、土台の石も一緒に運び、専門の大工さんが建てたのだそうす。

このお茶室は昭和の初め仙台から移したので、土台の石も一緒に運び、専門の大工さんが建てたのだそうす。一時は大分荒していましたが、戦争の混乱期を経て保存されたのは有難い事で、大切にお守りしてゆかねばと考へて居ります。

茶室からは曾つてのおほりの名残を止める広い庭が見える。取材に訪れたのは池畔や築山のつじが見事な花盛りの頃であつた。

宗康氏の村長時代の業績、特に村有林確保の前後の事情は佐藤司馬さん等からも伺つたが、その功績は抜群というべきだろう。而も当時の事を知る人も少くなり、やがて忘れ去られようとする事は残念である。村有林をうけついで愛林公益会が、収益金を公共施設を建てる案が進んでいると聞く。その一隅にでも何等かの形で宗康氏を顕彰する方法を講ずべきと思ふのは私だけだろうか。関係者の一考を煩わし度い。……序に申せば先年名譽町民が推戴された折、氏が選にもれたのも少し解し難い。位階とか何と彼とかが基準だったのならば何を言わんやだが……

……お茶室は昭和の初め仙台から移したので、土台の石も一緒に運び、専門の大工さんが建てたのだそうす。一時は大分荒していましたが、戦争の混乱期を経て保存されたのは有難い事で、大切にお守りしてゆかねばと考へて居ります。

茶室からは曾つてのおほりの名残を止める広い庭が見える。取材に訪れたのは池畔や築山のつじが見事な花盛りの頃であつた。

……門柱の根元をコンクリートで固めた事を非難する人もあるが、当時の応急措置としてはむしろ賢明だと言へべきだと思ふは長、混乱期の間に巨に倒壊してつたであらう……

……門柱の根元をコンクリートで固めた事を非難する人もあるが、当時の応急措置としてはむしろ賢明だと言へべきだと思ふは長、混乱期の間に巨に倒壊してつたであらう……

伊達の一家に嫁いできて由緒あるお茶室をお守りしてゆくめぐり合わせになりました。

昭和の初め仙台から移したので、土台の石も一緒に運び、専門の大工さんが建てたのだそうす。

昭和48年(1973年)

拓郷 第四号

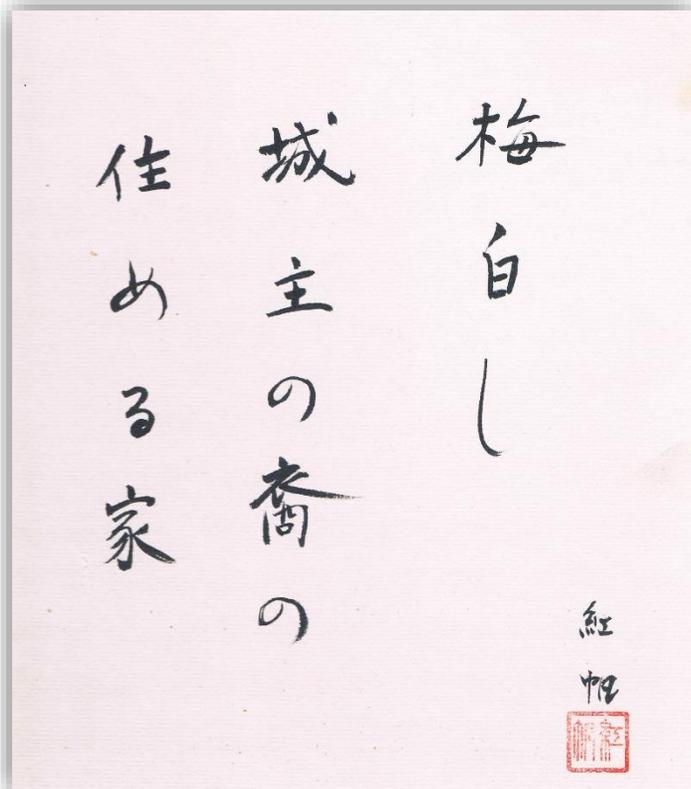
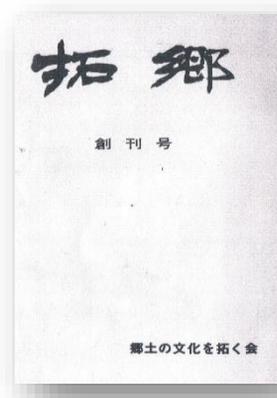
下 藤山 南見 東 藤南 前 藤南 採 藤南 悠

郷土の文化を拓く会

# 茶室の内山邸の梅を詠む

## 島田紅帆 ホトトギス同人

昭和47年(1972年)



### 俳句

#### 私の俳句談義

島田紅帆

それは大正の中頃、私の少年時代の頃のこと、私は文学少年を気取って当時の日本少年少年倶楽部などの少年雑誌に、誌、短歌、俳句などを投書し、全国の少年達とその成績を競ったものであった。その時実業之日本社の日本少年の雑誌記者に、早稲田大学文学部出身の中島薄紅という記者がおり、その選者から「紅帆」という雅号をもらった。それ以後ずっと現在までこの雅号で通してきたのである。

はじめは文芸と名のつくものは何でも一通りやり、少年雑誌の外文章世界などに短編小説なども投書して勉強したが、小説家になる程の才能のないことを知り、結局俳句だけをやることに落ちついた次第である。

私は昔現在の通信講習所を出ているれっきとしたポストマンなので、大正時代青雲の志を抱いて上京、東京の郵便局に勤めるかたわ

ら夜学に通って苦学していた。しかし忘れもしない大正十二年九月関東大震災にあい、帰郷して現在の仙台郵便局に通勤した。当時の客車は俗称マッチ箱客車といって、貨車の中に客車を一輛連結したもので通勤者は僅か二人であった。

たまたま互理から仙台電話局に通勤していた友人が俳誌ホトトギスを購読していたので、車中でそれを見せられ、はじめて俳句なるものにお目に懸った。しかし当時の私には省略文学の俳句を解することが難しく、何か漢文でも読むような気持であったが、よく味わって見ると離れ難い味があり、読めば読むほど「するめの味」のような気がした。この時から俳句のとりこになり、難しいが簡便で味わいのある面白い文学であると感じた次第である。

○ 城祉にまつる社や梅白し  
坂元神社

内山邸

● 梅白し城主の齋の住める家

井戸沢

○ このへんは村も辺鄙や山桜

四方山

○ 崖の萩葛の中より垂れ咲ける

磯崎山旧蹟

○ 今は昔唐船番所松落葉

(ホトトギス同人)



# 茶室の思い出写真

## 一見事なつつじ、野点もしたお庭一



広々とした茶庭



野点



# 茶室の思い出写真

—茶室の姿。外の柱が、松の木が、板倉が…—



# 茶室の思い出写真

— 茶室の中は、こんな風だった。  
床の間、棚、襖、障子、掛軸、額、お釜 —



# よせられた茶室の思い出

思い出話を  
集めています。  
どしどしお寄せください

坂元小学校に通っていた。  
坂元には他に見るべき珍しいものもなかったし、  
茶室とその敷地は、おいそれとは入れない、特別なところと思って、通学時に見  
ていた。時には覗いて見たいした。  
茶室がとても立派だった。殿様の茶室だと聞かされていた。つつじがとてもきれ  
いだった。

レストランオーナー(60代)

剣道をやっていたので、坂元小学校で試合があると、  
試合行き帰りには、立派だ、威厳あるな～、いったい何  
だろうなどと興味もって眺めていた。

M. S(50代)

私の記憶の中で一番古いと思われるもの

祖母(佐藤家から嫁に来ました)が日参(ほとんど毎日のように「お三の丸」にご機嫌う  
かがいに上がってました)した折に、頂いて来る和紙(後に懐紙と知りました)に包まれた  
上品な干菓子(和三盆だったのでしょね)。祖母は決して間食をしない人でしたので、千  
代(千ヨ)さん(お茶の先生の名で照子(テルコ)さんとも言われてました)が持たせてくれ  
たものです。祖母は必ず私にくれました。

(次期ご家督さまなので)お三の丸の人達は私達とは違うのだと思っていました。

ご門(大手門)に、流行り病の印、赤い布だったか、わらで作ったものだったか忘れてしま  
いましたが、何かが下がると急いであんこ餅を作った記憶があります。小学校に入る前頃  
だったかと。

ずっと「内山さん」とか「お茶室」とか言わずに「お三の丸」と言っていました。  
お茶のお稽古にあがるようになったのは、大学を卒業して家に帰って来てからです。その  
後、仙台や東京で勤めたいしたので、休んだ期間もありますが、先生が亡くなるまで通い  
ました。

いろいろな事が、次々と思い出されるのですが、今となっては口にするのが悲しくなるばか  
りです。

妙見(60代)

小学生の頃、通学で必ず茶室の前を通るわけですが、常に門の戸びらはしまっていて、  
誰のお家なんだろうと思っていました。そこが一年に何日か開いている時があり、のぞ  
いてみると、池があってツツジの花がぐるっと縁どるように咲いていて、秘密の花園のよ  
うな風景に見とれてしまったことを覚えています。

しかし、残念なことに、その頃は歴史的なこととか、何を建つ建物かなど知らないまま  
60才を過ぎました。ほんとうに地元になんか歴史を感じられるものがあつたこと 山元  
町民にもアピール不足です。子どもさんたちにも、ぜひ知っていただき、歴史を感じて  
もらいたいです。

H. K(60代)

## 三浦寛也さん(「いっ茶」組発起人)の茶室活用について

私はアメリカのメイン州に住み、ペイツ大学というリベラル・アーツカレッジで作曲を教えておりますが、2005年からコロンビア大学の中世日本研究所で、雅楽と邦楽のプログラムを中心とした日本文化によって国際交流を深め、後生に伝えていく活動もさせて頂いております。

父の実家が茶室から歩いて数分の坂元であり、20数年前両親も仙台から坂元へ戻り、現在も生活しております。また徳本寺は三浦家の菩提寺として代々お世話いただいており、私も山元町に毎年里帰りするたびに、お墓参りと茶室を訪れるというのが習慣になっています。

私がなかば荒唐無稽に思い描いている茶室修復後の活用への夢とアイデアを、お送りしたいと思いません。

地方再生という言葉が飛び交うようになったのは、バブル絶頂期にあった竹下政権のふるさと創成事業からでしょうか。しかし、いま考えてみると「地方」再生という言葉は、紛れもなく東京という中心から見た、いわば辺境的な「地方」というニュアンスも否めません。それから20年以上の歳月が流れ、震災が起こり、山元町のような被災地にとって地方再生ならぬ地域再生という言葉は、今まさに切実なものとなりました。日本語の、「くに」という概念は、そもそも「近代国家」とは異なるように思えます。その昔、「くに」といえば、旧藩を指し、旧藩ほどのサイズが日本人にとって想像しやすい「くに=共同体」なのかもしれません。旧藩は、現在の自治体とはサイズもシステムも違いますが、仙台「藩」の仙台城にあった唯一の遺構である、この山元町の茶室を修復して活用するということは、まさに「くに」としての地域再生にふさわしい事業のように思えます。

しかし、いまだに仮設住宅で生活されている方々のことを考えると、文化施設の修復という作業は、優先順位の最下位に位置するような、非常識な案件のように思われるかもしれません。その一方で、人口減少が震災前から続いている町の状況を考えると、コミュニティの中心となる拠点から、交流人口を増やすきっかけを作り出していくことも、想像の射程に入れる必要があると思います。

この山元町の茶室について、キリギス出身のアーティストの友人と話す機会があり、修復された後の茶室の活用方法にも話が及びました。彼女の出身地であるキリギスでは、シルクロード沿いに Чайハナと呼ばれるティーハウスが昔からあって、中央アジアをキャラバンが行き来していた時代、商人たちはそこで荷を下ろし、商いをしながら、遠い地で見つけた珍しい動物や、異国に住むエキゾチックな人々の話に花を咲かせたりしていました。それを聞く地元の人々は、寝転んだり頬杖をついたりして、パイプをくゆらせながら、詩人の語る叙事詩や音楽に耳を傾けたり、宗教や政治について、意見をたたかわせたりしていました。いってみれば、 Чайハナは、コンサートホールであり、公民館であり、市場でもあったわけです。茶を飲むという行為は、茶を飲むという行為それ以上のものである、ということは利休の茶の湯がしめしてくれているわけですが、日本以外の文化圏の中でも茶を飲むという行為から、情報の伝達と物流が起こり、そこからコミュニティが発生していった事実は見逃せません。

たとえば、町の人たちが憩える場としての茶室、またはそれに併設したカフェや地元の特産品を売るコーナーを設ける一方で、茶を飲むという行為、または茶の湯というテーマをもとに、世界のアーティストに作品のアイデアを募り、優れたアイデアを出したアーティストを招聘し、アーティストレジデンシーとして機能させていくことはできないでしょうか？

アーティストレジデンシーというシステムは、その言葉通りアーティストが地元のコミュニティで生活をし、地域住民との交流を図りながら、アートを作る場のことであり、作る人、地域で支える人、そして作品を見に訪れる人々と、交流が生まれる地域振興の装置として世界中でいろいろな試みが行われています。私自身も、スペイン・アンダルシアの人口3000人ほどの小さな村にあるレジデンシーや、マレーシア東部の民家を使ったプログラム、またはアルゼンチンのブエノスアイレスの個人のギャラリーが主催しているレジデンシーなどで創作をさせて頂く機会があり、よそ者のアーティストとして、数週間からふた月ほど、それぞれの場所に滞在しながら、さまざまな地域とアートの共生の方法を実体験することができました。

茶の湯文化は、茶を一服するという日常の行為を洗練させることによって芸道へと昇華した経緯があり、茶室がサロンのような役割をはたしながら、立花や茶の湯、日本の水墨画という、東山文化を形成してきました。アーティスト=芸道者が生活に密着し、生活そのものの見方を変えるという意図に置いて、21世紀のアーティストレジデンシーとつながる部分が大いにあるような気がします。また、千利休自刃のあと、秀吉の茶頭となった古田織部は、キリスト教を通じて流入した外国文化を茶の湯に大胆に取り入れ、和漢、そして西洋のルーツを織り交ぜた、きわめて日本的な編集力を生かした文化の礎をつくったともいえます。ここで茶の湯は国境を越えた文化の受け皿としても機能したわけです。

そう考えると、この山元町が持つ茶室は、山元町という「くに」から世界に発信できる装置になる得るのではないのでしょうか？

# アンケートのまとめ

一茶室をどんな風に使いたいですか？  
利用アイデアをお聞かせください。ー

2016年末～  
2017年1月  
署名と  
一緒に収集

## キーワード

2017年1月31日 山元「いっ茶」組

### 山元町

誰もが使える・気軽に・自由に  
やすらぎ・憩い 楽しく集まる  
コミュニケーションの場  
カフェ コンサート 朗読会 句会  
観光名所  
町の活性化  
茶の湯文化 お茶会 茶道  
子供の茶道経験  
伝統文化 歴史、文化 遺産  
後世に残すを

歴史と伝統文化が感じられる  
雰囲気がある  
大人も子供も、気軽に自由に、  
やすらぎ、楽しく憩える、  
コミュニケーションの場所が欲しい!!  
\*公民館などの現代建築でないもの  
・後世に残す場所、遺産である  
・観光名所  
・町を活性化する場所

### 山元町近隣(県内)

散策路 ロケ地  
先進的芸術との組み合わせ  
つどう場所 茶の湯を通した憩いの場  
読書会 朗読会 カフェ(出前) お茶サロン  
国際交流 関西などとの交流  
小中学生と高齢者の交流  
子供茶道 茶の湯体験 お茶会  
気軽 足の悪い人も 自由に  
山元を離れているが一緒に活動したい  
歴史が感じられる 歴史と文化を継ぐ場

交流の場に  
・国際交流  
・東北以外の地域交流  
・子供と老人交流  
・茶道と先進芸術  
帰省の楽しみの場に  
・歴史が感じられる空間  
・歴史と文化を継ぐ場

### 宮城県外

町外からも自由に 気軽、多くの人に  
ツアーを  
子供達の文化教育の場 茶室教室 本格的茶の湯  
歴史を大切にする空間 町の宝もの 文化を感じる  
庭も整備して避難場所としても

歴史を大切に  
町外からも気軽に  
・文化教育の場  
・町の宝もの

- ・茶道を学ぶ場
- ・子供(小中学生)茶道
- ・本格的お茶会
- ・コンサート
- ・朗読会/読書会/句会
- ・カフェ/お茶サロン
- ・子供の文化教育
- ・歴史勉強
- ・散策路
- ・ロケ地
- ・ツアー
- ・庭は避難場所として